

2.

日本語研修コース(年報編,2003年度後学期・2004年度前学期)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮谷, 敦美, 橋本, 慎吾 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3421

2. 日本語研修コース

留学生センター講師 宮谷敦美・橋本慎吾

1. 第15期（2003年9月～2004年3月）

第15期の日本語研修コースは初級・初中級・中級・中上級の4レベル開講した。ここに、留学生センターに直接配置された国費研究留学生2名と、学内公募による留学生22名（うち、国費教員研修生1名、国費研究留学生2名、協定校からの交換留学生7名）、計24名が受講することになった。プレイスメントテストおよび面接の結果、Aクラス（初級レベル）が9名、Bクラス（初中級レベル）が8名、Cクラス（中級レベル）が4名、Dクラス（中上級レベル）が3名となった。

1.1. 日程と時間割

【スケジュール】

10月10日（金）	開講式
10月13日（月）	授業開始
10月30日（木）～11月2日（日）	学祭（休講）
12月20日（土）～1月12日（月）	冬期休暇
2月25日（水）	授業終了
3月1日（月）	修了式

1.2. Aクラス

1.2.1. 受講者

第15期日本語研修コースAクラスの受講者は以下の通りである。

国籍	性別	身分・所属
フィリピン	男性	国費教員研修留学生・留学生センター
ベトナム	男性	国費研究留学生・留学生センター
ベトナム	女性	私費研究生・医学部
米国	女性	交換留学生・地域科学部
米国	男性	交換留学生・教育学部
中国	男性	私費研究生・農学部
中国	男性	国費研究留学生・農学部
中国	男性	私費研究生・地域科学部
中国	女性	私費研究生・教育学部

第15期も、教育学部所属の学生や、将来日本語による研究を進めなければならない漢字圏からの学生が多いため、口頭表現能力だけでなく、読み書き能力の基礎も養成できるように配慮した。また、日本語での研究を考慮に入れ、コース前半で、コンピュータでレポート作成やスライド作成のための基礎練習を行い、後半では、プロジェクトワークを通して、日本人との生の日本語にも対応

できる能力養成のための総合学習を重視した。

履修科目は、「総合日本語 A」、および技能科目の「口頭表現 IA、口頭表現 IB、口頭表現 IC、口頭表現 ID、口頭表現 IE、文章表現 I、パソコン演習」をすべて必修とした。

1.2.2. 時間割と授業内容

	月	火	水	木	金
1	総合日本語 A [三輪実]	総合日本語 A [宮谷]	総合日本語 A [宮谷]	総合日本語 A [宮谷]	総合日本語 A [三輪実]
2	総合日本語 A [宮谷]	総合日本語 A [藤江]	総合日本語 A [加藤]	総合日本語 A [野原]	パソコン演習 [野原]
3	文章表現 I [宮谷]	口頭表現 IB [今井田]		口頭表現 IA [橋本]	口頭表現 IC [藤江]
4	口頭表現 IE [太田]	口頭表現 ID [藤江]			

- (1) 総合日本語 A：基本文型の理解と運用能力を高める。

使用教材『みんなのほんご初級 I・II』（スリーエーネットワーク）

『Basic Kanji Book vol.1』（凡人社）

編集プリント

総合日本語 A については、第 14 期に準ずるので、詳細については『岐阜大学留学生センター紀要 2003』pp.47-48 の「文法」を参照されたい。

- (2) 口頭表現 IA：リスニング能力を高めることを目的に、既習文型を用いた文や会話の聞き取りを行い、それらの表現を用いた会話を練習した。また、学習者の母語に特徴的な発音を直す練習も行った。

使用教材：聴解プリント集

- (3) 口頭表現 IB：学生が日々の生活で遭遇するような場面を取り上げ、会話練習を行った。また、ボキャブラリー・ビルディングを目的に「テーマ語彙」を学習した。

使用教材：『生活会話』（岐阜大学留学生センター開発教材）

- (4) 口頭表現 IC：会話に特徴的な表現や談話構造について、ビデオを用いて学習した。また、ビデオから非言語表現および話し方（態度）についても学習した。

使用教材：自作プリント集

- (5) 口頭表現 ID：学生が書いた作文を基に、ピア・フィードバックとディスカッションを行った。

- (6) 口頭表現 IE：日本人学生と共に、テーマに基づいて、ディスカッションや会話練習を行った。

使用教材：自作プリント集

- (7) 文章表現 I：書き言葉の特徴と談話構造を中心に学習した。

使用教材：自作プリント集

- (8) パソコン演習：コンピュータを用いた自律学習の支援と、プロジェクトワークのためのコンピュータ技術の指導を行った。

使用教材：自作プリント集

1.2.3. プロジェクトワーク

コース後半に行うプロジェクトワークでは、学生が興味を持った内容について、日本人学生にインタビューやディスカッションを行ない、調査結果を基にスライドを作成し発表を行った。以下に、今期の学生が取り組んだテーマを紹介する。

- ・日本人と外国人が日本のテレビを見る習慣について（米国・男性）
- ・日本料理と留学生（米国・女性）
- ・英語学習について（中国・男性）
- ・数学をコンピュータで教えること（フィリピン・男性）
- ・留学生の日本へ来た感想について（中国・女性）
- ・留学生の日本語の勉強（中国・男性）
- ・留学生が日本で勉強することを選んだ理由（ベトナム・男性）
- ・結婚についての考え（ベトナム・女性）
- ・日本のコンピュータゲームとテレビゲームについて（中国・男性）

1.2.4. 新しい授業の試みについて ～日本文化を考える～

以前、日本語研修コース初級クラスは、専門の研究は主に英語で行う学生が中心であったため、日本語学習の目的は主に日常生活に必要な日本語コミュニケーション能力養成であった。しかし、近年、初級レベルにも日本語運用能力が低い交換留学生や、来日後半年から1年後には研究を始める予定の人文社会系分野を専門にする留学生が増加している。このように日本語研修コース初級クラスの性格が徐々に変化している。日常生活に必要な日本語にとどまらず、将来的には日本語で論文作成やディスカッションをしなければならない学生が多くなってきているということである。そこで、初級段階から、身近なトピックで発見したことや感じたことを日本人とディスカッションする機会が重要であると考え、口頭表現Ⅱで、日本文化をテーマに日本人学生と留学生がディスカッションする授業を計画した。

この授業は、1月に2回連続で行った。事前に、Aクラスの学生と、口頭表現Ⅱに参加している日本人学生にインスタントカメラを配布し、自分が「日本らしい」と思う写真を撮ってきてもらった。グループに分かれ、現像した写真を見ながら、どうしてそれを日本らしいと考えたのか説明したり、意見を述べ合ったりした。その後で、グループ全員が「日本らしい」と納得できるものとはできないものに分類し、どうしてそのように思うのか理由を考えてもらった。最後にグループごとに発表し、全体ディスカッションをもった。「すし」「さしみ」「柿」など食べ物の写真、「日本家屋」や「神社」などいわゆる日本文化として典型的に挙げられるものの写真を撮ってきた日本人学生が多かったのに対し、留学生は「初心者マーク」「放置自動車」「ゴミ捨て場」など自国と比較して撮ったものが多く、日本人学生も新たな視点に気づくことが多かったようである。(1.1-1.2 宮谷執筆)

1.3. Bクラス

研修コースBクラスは初中級レベル（未習者対象の研修コースAクラスの学習課程修了相当）として開講しているが、各年度後学期では日韓共同理工系学部留学生事業（第3章参照・以下日韓プログラム）の学生が、韓国での半年間の予備教育を経て、概ね初級を終了して来日するので、後学期のBクラスには日韓プログラムの学生が参加することが多い。

1.3.1. 受講者について

プレースメントの結果、2003 年度後学期の学生は計 10 名となった。

国籍	性別	身分・所属
韓国	男性	日韓共同理工系学部留学生事業・留学生センター
韓国	男性	日韓共同理工系学部留学生事業・留学生センター
中国	男性	私費研究生・工学部
中国	男性	私費研究生・工学部
中国		私費研究生・農学部
オーストラリア	女性	交換留学生・地域科学部
オーストラリア	女性	交換留学生・地域科学部
オーストラリア	女性	交換留学生・教育学部
アメリカ	女性	交換留学生・教育学部
ミャンマー	女性	国費研究留学生・農学部

学内公募の学生は、研修コース A クラスからの継続が 4 名（うち 3 名は交換留学生）、補講コース受講者 3 名、新規来日 1 名（交換留学生）である。

1.3.2. 時間割と授業内容

第 1 章で述べたセンターのコース改編に伴い、今年度後学期から、日本語研修コースは 1 時間目に総合日本語、2 時間目に技能科目を置くこととなった。技能科目は、B レベルから D レベルの選択クラスである。また、「技能」という観点から、技能クラスは、全学向け補講と部分的に共同開講とした。

[時間割]

	月	火	水	木	金
1	総合日本語 B [野原]	総合日本語 B [橋本]	総合日本語 B [富田]	総合日本語 B [中村]	総合日本語 B [小寺]
2	文章表現Ⅱ [河合]	口頭表現Ⅱ A [橋本]	聴解演習Ⅱ [小寺]	文章理解Ⅱ [宮谷]	口頭表現Ⅱ B [橋本]

(1) 総合日本語（1 時間目）

これまでは教科書『中級の日本語』（The Japan Times）と、この教科書に準拠したワークブック（岐大留学生センター作成）を用い、1 課 10 コマ（文法 4 コマ、会話 2 コマ、読解 1 コマ、ワークを使った口頭表現練習 3 コマ）で進めてきたが、センターのコース改編に伴い、1 時間目の総合日本語 B でこの教科書を使用することにし、1 課 6 コマ（文法 4、会話 1、読解 1）で進めていくことにした。

(2) 技能科目（2 時間目）

B クラスの場合、技能科目は 5 コマ必修となる。このうち補講のクラスの専門日本語と特演との合同開講クラスがある。以下に示す時間割では、文章表現演習、聴解演習、文章理解が合同開講クラスに当たる。このクラスの内容については、第 6 章専門日本語の項を参照。口頭表現ⅡA、ⅡB は研修 B クラスのみの開講で、依頼、誘いなどの会話演習を行なった。

1.3.3. 問題点：交換留学生の受け皿としての研修コース

今期の B クラスは、日韓プログラムの学生が 1 月に入って少し休みがちになったことを除けば、特に問題になることはなかった。クラスについてではなく、コース運営上の問題点としては、今期 B クラスにおける交換留学生の割合が 50%（8 名中 4 名）であるということ、そのうちの 3 名が研修 A からの継続、つまり 1 年を通して研修コースを受講しているということである。問題は、学生の受講ではなく受入体制の問題である。これは昨年度の年報でも問題点として指摘したところである。状況は全く変わっていないので、以下で再度指摘しておくこととする。

交換留学生の受け入れは、現在は学部レベルで行なっている。交換留学生は学部の指導教官がつき、学部の授業を受けることが前提となっており、実際交流協定にもそのような文言がある。とすれば、実際には学部の授業が受けられるレベルの日本語力が必要であることは自明のことであり、日本語力が不足している場合はそもそも交換留学生として受け入れることはできない。しかし実際に受け入れている交換留学生の中には、ほとんど日本語ができない学生も多く含まれている。また交換留学生自身が専門として日本語・日本文化を希望しているケースが増えてきており、この場合、留学の目的は日本語学習であると言えるであろう。しかし、岐阜大学には日本語・日本文化を専門とする学部が存在しないため、留学生センターの日本語コースを受講するケースが増加しているのである。

このような背景の中、ここ数年、日本語コース「のみ」を受講して帰国するというケースが少しずつ増えてきている。研修コース、特に初級のコースを受講すれば、ほぼ 1 日中日本語の授業があるから専門の授業は受けられない。その状態が半年、通年と続くことにより、結局日本語のみを学んで帰国することになる。

つまり、交換留学生の留学期間をずっとセンターが指導している状況が増えてきている。もしそうなら留学生センターが交換留学生を受け入れれば話は簡単であるし、ある意味筋が通っていると考えられる。しかし現状ではセンターが受け入れることはできない。センターは学部ではないからである。

留学生センターは、学部が受け入れた交換留学生に対し日本語の指導を行なっている。このことは「留学生センターは交換留学生の受け皿として機能している」と言い換えてよい。センターとしては学部に対する協力を惜しんでいるわけではないので、受け皿であること自体に問題はない。

問題は、受け皿であることが公式なものではないということである。学部から正式に日本語教育の依託があり、その期間中の在籍身分がセンターになる。こういった手続きを踏まえた上であれば、センターは本学の組織の中でも有機的に機能するのである。しかし現状は、ただ交換留学生に日本語を教え、修了させても、その事実はどこにも残らず、それぞれの学部に 1 年間留学したという事実のみが残るわけである。この構造的矛盾は、実は学部の指導教官側も感じているところのようであり、今後は何らかの形で解決の道を模索していくことになるかと思う。

以上の記述は、昨年度の年報と同じ文面である。状況が変わるまで、この問題点を指摘し続ける必要があると思う。多少は文面に手が入れられるようになるとよいのであるが。

1.4. C クラス・D クラス

この 2 クラスは中級・中上級レベルのクラスであり、日本語・日本文化研修プログラム（以下日研生プログラム）の学生が「日本語能力試験 2 級相当」の学力を有するのでこのクラスに多く在籍する。技能クラスを含めた授業内容については第 3 章「日本語・日本文化研修プログラム」を参照していただきたい。

1.4.1. 受講者

C、D クラスの受講者は以下の通りである。表中網掛け部分は途中辞退した学生である。この点については 1.4.2 で述べる。

クラス	国籍	性別	身分・所属
C	スウェーデン	女性	日研究生プログラム・留学生センター
C	タイ	女性	日研究生プログラム・留学生センター
C	タイ	女性	日研究生プログラム・留学生センター
C	ミャンマー	女性	教員研修留学生・教育学部
C	ベトナム	女性	私費研究生・地域科学部
C	中国	男性	私費研究生・工学部
C	中国	男性	私費研究生・教育学部
D	シンガポール	女性	日研究生プログラム・留学生センター
D	中国	女性	日研究生プログラム・留学生センター
D	中国	女性	日研究生プログラム・留学生センター
D	韓国	男性	日韓共同理工系学部留学生事業・留学生センター
D	韓国	女性	交換留学生・地域科学部
D	中国	女性	私費大学院生・工学部
D	中国	男性	私費大学院生・工学部

1.4.2. 問題点：学内公募の学生の日本語へのとりくみ

大きな問題として浮上するのは、学内公募の学生、つまり研究生や院生の取り組みについてである。彼らにとって、日本語の学習はやはり専門より重要度は低い。公募の受入の際、半年間は日本語に集中すること、という念押しはするわけであるが、また当初は学生もその意志があったであろうが、コースが始まり、毎日のように多くの課題が出され、しかも研究のほうも進めなければならない状況が続き、当初の意志は弱まり、毎日の宿題や発表課題などへの取り組みが甘くなり、研究のための欠席が増え、結果、C クラスでは 3 名、D クラスでは 2 名の途中辞退者が出たことは非常に大きな問題である。

この問題については解決策がはっきりわからない。例えば公募学生の指導教官に連絡し、注意を促したところで、学生本人が研究重視と考えるのであれば改善はないであろう。もちろん、学生にとって研究成果は将来にかかわるので重要であることは理解できる。あくまで日本語教育の観点から問題であると述べているのである。

受入の際の意志の確認を徹底することしか、現状では方策はない。状況が悪くなれば、別の策を講じる必要も出てくると思われる。(1.3-1.4 橋本執筆)

2. 第16期（2004年4月～2004年9月）

第16期の日本語研修コースは初級・初中級・中級・中上級の4レベル開講した。ここに、留学生センターに直接配置された国費研究留学生6名と、学内公募による留学生25名（うち協定校からの交換留学生9名）、計31名が受講することになった。プレイスメントテストおよび面接の結果、Aクラス（初級レベル）が11名、Bクラス（初中級レベル）が7名、Cクラスが12名、Dクラスが1名となった。

2.1. 日程と時間割

【スケジュール】

4月9日（金）	開講式
4月12日（月）	授業開始
7月9日（金）	トヨタ研修旅行
7月30日（金）	授業終了
9月16日（木）	修了式

2.2. Aクラス

2.2.1. 受講者

第16期日本語研修コースAクラスの受講者は以下の通りである。網掛けの学生は5月に履修辞退した。

国籍	性別	身分・所属
インド	男性	国費研究留学生・留学生センター
セネガル	女性	国費研究留学生・留学生センター
マレーシア	女性	国費研究留学生・留学生センター
コンゴ	男性	国費研究留学生・留学生センター
アルジェリア	男性	国費研究留学生・留学生センター
ミャンマー	女性	国費研究留学生・留学生センター
中国	男性	私費研究留学生・教育学部
バングラデシュ	女性	私費研究留学生・医学部
ベトナム	女性	私費研究留学生・教育学部
中国	男性	私費研究留学生・地域科学部
オーストラリア	男性	交換留学生・教育学部

第16期は、国費研究留学生が多く、日本語学習が初めての学習者が多かった。そのため、コースの前半は、文法学習と口頭練習をより重視したクラス運営を行った。

コース後半では、プロジェクトワークを行った。今期は、クラスでホームページを作成するという新しい課題に取り組んだ。その成果は岐阜大学留学生センターホームページをご覧ください。

2.2.2. 時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語 [野原]	総合日本語 [宮谷]	総合日本語 [三輪]	総合日本語 [三輪]	総合日本語 [野原]
2	総合日本語 [宮谷]	総合日本語 [宮谷]	総合日本語 [宮谷]	口頭表現 D [野原]	総合日本語 [藤江]
3	文章表現 I [宮谷]	口頭表現 IC [藤江]	口頭表現 IB [加藤]	口頭表現 IA [橋本]	パソコン演習 [小寺]
4		口頭表現 IE [太田]			

クラス内容については、第 15 期と大きく変更点がないので、詳細については本章 1.2.2 を参照されたい。

2.2.3. プロジェクトワーク

今期もプロジェクトワークを行った。今期は日本語に初めて触れる学生が多かったこともあり、タスクの難易度を下げた。そのため、例年のような日本人学生へのインタビューは行わず、留学生の国について紹介するためのホームページを作成するというタスクに変更した。ホームページ作成については、コンピュータグラフィックを専攻する学生が率先して担当してくれた。ホームページを作成するという観点から、どのような情報が適切かなどについて事前に全員で話し合った。今期の学生が取り組んだテーマを以下に紹介する。

- ・世界でいちばん高いペトロナスツインタワー（マレーシア・女性）
- ・天安門の近くの北海公園（中国・男性）
- ・中国の有名な町 西安（中国・男性）
- ・ミャンマーの水まつり（ミャンマー・女性）
- ・オーストラリアン・アイドル（オーストラリア・男性）
- ・ビジャヤの自然（アルジェリア・男性）
- ・コンゴ民主共和国についてドキュメンタリー映画をつくる（コンゴ・男性）
- ・タージマハルへ行く（インド・男性）
- ・ベトナムの旅行紹介（ベトナム・女性）
- ・中国に仕事で行く人のための中国紹介（中国・男性）

(2.1-2.2 宮谷執筆)

2.3. B クラス

2.3.1. 受講者

今期は予備教育に該当レベルの学生がいなかったため、学内公募を行ない、7名（中国2、オーストラリア1、アメリカ2、ベトナム2）を受け入れた。このうち交換留学生は3名であった。（網掛けは途中辞退者である）

国籍	性別	身分・所属
中国	男性	私費研究生・応用生物学部
中国	男性	私費研究生・応用生物学部
オーストラリア	男性	交換留学生・教育学部
アメリカ	男性	交換留学生・教育学部
アメリカ	女性	交換留学生・地域科学部
ベトナム	男性	国費大学院生・医学部
ベトナム	男性	私費大学院生・工学部

2.3.2. 時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語 B [富田]	総合日本語 B [橋本]	総合日本語 B [富田]	総合日本語 B [橋本]	総合日本語 B [小寺]
2	聴解演習 II [河地]	口頭表現 IIA [橋本]	文章理解 II [富田]	文章表現 II [六郷]	口頭表現 IIB [河合]

網掛けの部分が、先学期同様、補講との合同開講（専門日本語）である。授業内容については第6章「専門日本語の項を参照いただきたい。

2.3.3. 問題点

(1) 途中辞退者について

今学期は途中辞退者が2名出た。1名は交換留学生で、国の授業の関係でコース修了より1ヶ月以上早く帰国しなければならなくなった。内規ではあるが、1ヶ月以上の連続した欠席は認めないこととなっており、この学生はコースを途中辞退し、帰国した。

もう1名の学生は、上記の時間割に重なる専門の授業を1コマ受講していたことが、やはり内規に抵触した。学内公募の際、Bクラス参加の条件として、午前10コマ必修を挙げており、この時間帯に専門の授業（指導教官のゼミなど）がある場合は受講を認めないこととなっている。そのため、コースを受講したいが応募をやめる学生も少なくない。しかしこの学生は、そのことを知りながら、二重受講をしていた。この学生の言い分としては、専門の授業に全コマ出席する必要はない（試験によって単位はとれるという意味らしい）ので、両立は可能だ、とのこと。この論理がナンセンスであることは説明するまでもない。今後このような事態が起こるのは、研修コースの学内公募を進める上で大きな問題となるので、学生には今後も専門の授業を取るのであれば研修コースは辞退しなければならない旨説明し、結局途中辞退した。

(2) 交換留学生の受講

これについては 2003 年度後学期の 1.3.3 を参照のこと。

(3) 補講合同コマの学生数

補講との合同クラス（専門日本語）には、30 名以上の学生が参加している。これは研修コース、補講コースの両方から学生が参加しているからであるが、短期集中コースである研修コースにおいて、20 名以上のクラスが複数開講することはこれまでになかったことである。それは、集中コースの緊張感を切らさないために 1 クラスの定員を 10 名前後に押さえてきたこともある。しかし、独法化を迎え、このような形式での開講は今後も避けることができないと考えられる。大規模クラスにも対応できる授業内容、授業方法などを今後検討していく必要がある。

(2.3. 橋本執筆)

2.4. C クラス

C クラスは、学習者によって技能ごとの日本語レベルにばらつきがあった。また、日本語学習と平行して研究室で研究をしており、発表や論文執筆を日本語でしなければならないという学習者が多かった。そのため、コース全体の達成目標として、以下の 3 点を設定し、指導内容を決定した。

- ・日本語の基礎を復習しながら、総合的な日本語能力を養成する。
- ・話し言葉と書き言葉の使い分けを理解し、コントロールできるようにする。
- ・論理的な文章構成能力を養成する。

2.4.1. 受講者

第 16 期日本語研修コース C クラスの受講者は以下の通りである。網掛けの学生は 5 月に履修辞退した。

国籍	性別	身分・所属
中国	女性	私費研究生・応用生物科学部
中国	男性	私費研究生・応用生物科学部
中国	男性	私費大学院生・医学部
中国	女性	私費大学院生・応用生物科学部
韓国	男性	交換留学生・工学部
中国	男性	私費研究生・応用生物科学部
韓国	男性	交換留学生・工学部
中国	男性	私費研究生・工学部
米国	女性	交換留学生・教育学部
ブラジル	男性	交換留学生・工学部
中国	男性	私費大学院生・工学部
中国	女性	私費研究生・工学部

2.4.2. 時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語 C [宮谷]	総合日本語 C [河合]	総合日本語 C [小寺]	総合日本語 C [六郷]	総合日本語 C [藤江]
2	聴解演習 II [河地]	口頭表現 IIA [橋本]	文章理解 II [富田]	文章表現 II [六郷]	口頭表現 IIB [河合]
3		異文化理解 [牟田]			

履修科目は、総合日本語 C、技能科目の「口頭表現 IIA、口頭表現 IIB、聴解演習 II、文章表現 II、文章理解 II」をすべて必修とし、「異文化理解」は選択履修とした。技能科目については第 6 章の「専門日本語」の項を参照いただきたい。

- ・総合日本語 C： 文法、語彙の学習と読解の練習をした後、読解で取り上げた文章やトピック資料に基づいて、ディスカッションをし、文章にまとめる練習を行った。文章はデータを比較説明し、分析を述べるものを中心に練習した。また、話し言葉と書き言葉の違いについても集中的に学習した。

使用教科書『中級から上級への日本語』（The Japan Times）

『日本語生中継 中～上級編』（くろしお出版）

(2.4. 宮谷執筆)

2.5. D クラス

先学期同様、このクラスは日研生プログラムの学生が多く受講しているクラスである。授業内容については第 3 章を参照のこと。

今学期は学内公募 1 名で、途中辞退はなかった。この学生は交換留学生で、非常にまじめに取り組んだ。自分の大学に戻ったときの成績に関係することも多少は関係していると思われる。つまり、先学期に辞退した学生は研究生あるいは院生で、研究優先であったのに対し、交換留学生は日本語の授業中心であることが決定的に違うと言えるのかもしれない。（誤解しないでいただきたいのは、実態としては辞退せずに最後まで修了する研究生・院生がほとんどであり、決して全ての学内公募の研究生・院生が問題ありと言っているのではないということ）

2.6. 今後の展望と課題

独法化を迎え、厳しい財政見直しが行なわれる中、留学生センターの日本語コースにも非常勤講師採用予算の削減が行なわれている。今後も削減は続いていくことになるのであろうか。このような状況の中で、可能な限りカリキュラムに影響を与えないコース運営の変更が必要となる。2003 年度後学期の改編は独法化以前の改編であるが、当然独法化をにらんでの改編であった。今後より厳しくなる状況に対処するために、コースの詳細な分析が必要となるであろう。

(2.5-2.6 橋本執筆)